

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<図書紹介> 『自由への道（全六冊中の一～三）』
サルトル著 海老坂武、澤田直 訳 岩波書店 二
〇〇九年

著者	武田 昭彦
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	7
ページ	75-75
発行年	2011-06
URL	http://hdl.handle.net/10114/7212

【図書紹介】

『自由への道（全六冊中の一・二）』

サルトル著 海老坂武・澤田直 訳 岩波書店 二〇〇九年

武田 昭彦

六十年ぶりに、海老坂武・澤田直、両氏のご努力でサルトルが非常に読みやすくなった、喜ばしい限りである。『自由への道』は、『嘔吐』（これも昨年七月、鈴木道彦氏によって新訳となり、人文書院から刊行）と並んで、サルトルの小説の代表作だが、これら二つの既訳は誤訳も多く読み辛かった。だから、サルトルを愛する者たちには待望の新訳である。新訳のよい点は、読みやすいということもあるが、訳者両氏のこれまでのサルトル研究の成果がそこに存分に生かされていることだろう。訳注のまったくなかつた既訳にくらべ、本書の訳注及び訳者解説は、非常に内容があり、有益である。

戦後まもなく、サルトルはそれこそサクサクに翻訳された感があつた。私が上京した当時も、まだその迷訳が健在で、サルトルやカミュに興味を覚え読んだけれど、「よくわからないサルトル」というのが、先入観としてわたしの内に残ってしまった。その後、めぐり合わせかどうかは分からないが、矢内原伊作先生のものでジャコメッティを研究するようになり、ジャコメッティの友人だったサルトルを

正確に理解したいと思うようになった。ジャコメッティの「自由」が本書『自由への道』のテーマと何か関連をもっているのではないかと考えたからだ。だが、そんなことは当たり前で、戦前・戦後（一九四〇～五〇年代）のバリのあのモンパルナスの狭い空間情況の中で、哲学者であれ芸術家であれ、みなが同じような問題を共有していたのである。

さて、図書紹介が思い出話になってしまった。話を戻すと、本書『自由への道』は、全六冊であり、今回紹介するのは、その内の三冊、すなわち一・二が「分別ざかり」と題された第一部、三が第二部の一九三八年九月二三日から三〇日までの、「猶予」と題された第二次世界大戦の前夜の激動の一週間の物語の一部（九月二三～二十四分）である。だから翌年四月に刊行された本書の四冊目も含めて述べなければならぬが、紙数がないので、「分別ざかり」について一言述べておこう。これは、わずかに四十八時間の物語である。そこにはいくつかの特徴が凝集されているが、もっとも重要なのは「まなざし小説」ということ、これは哲学書『存在と無』との関係においても重要な観点である。反哲学の哲学小説とも言えるので、ぜひ読んでいただきたい。

原著 Jean-Paul Sartre, *Les chemins de la liberté*, Paris, Gallimard, 1945-9.